

## 世界の平均寿命は 35 年間で 10 年延長—GBD2015 より

生存期間を改善し、寿命を延ばすには、その時々各地域の死亡率や傾向に関するエビデンスが必要となる。GBD2015 は 195 か国と領地における 1980～2015 年の全死因死亡および 249 項目の原因別死亡を包括的に評価する世界規模の調査である。

本研究では、GBD2013 および GBD2010 で開発された解析法を改良した方法により、年齢・性別・地理・年代別の全死因死亡率を推算した。GBD2015 では、エボラウイルス病を含む 8 つの死因が新たに加えられた。解析の結果、世界的な出生時の期待余命(寿命)は、1980 年には 61.7 歳であったのが、2015 年には 71.8 歳にまで延長した。サハラ以南のアフリカ諸国では、2005 年から 2015 年に寿命が大幅に延長した国があり、AIDS による生命の大規模喪失の時代からの回復がみられた。それと同時に、戦争や対人暴力により死亡率が上昇し、寿命が横這いまたは短縮した地域も多かった。シリアでは、2005 年から 2015 年に寿命が 11.3 年短縮し、62.6 歳にまで低下した。2005 年から 2015 年までに、全死亡数は 4%増加したが、年齢標準化死亡率は 17.0%低下し、人口の増加と年齢構成の転換がみられた。このパターンは、非感染性疾患 (NCD) やいくつかのがん、虚血性心疾患、肝硬変、アルツハイマー病、その他の認知症にもみられた。原因別死亡率と社会人口学的指標 (SDI : 1 人当たりの所得・学歴・出生率に基づく指標) の関連についての解析では、SDI の上昇に伴って、死因や年齢構成が規則的に変化することが示された。若年死亡率 (損失生存年数〈YLL〉の指標) の国別パターンには、SDI に基づく YLL の予測値の間にずれがあり、ほとんどの地域において YLL 増加の主要な原因は虚血性心疾患、脳卒中、糖尿病であったが、多くの場合、SDI に基づく YLL の実測値と予測値の比には顕著な不一致が認められた。

したがって、1980 年から 35 年間に、世界の年齢別死亡率は着実に改善しており、このパターンは過去 10 年間持続している。多くの国ではこの改善は予測よりも迅速であったが、一部の国では寿命が短縮し、いくつかの死因の年齢化標準死亡率が上昇していた。また、年齢標準化死亡率が改善していても、人口増加や高齢化が進んだために非感染性疾患 (NCD) による死亡数が増加した国も多く、これが保健システムの需要の増大につながっていることが示唆された。

出典 : Lancet. 2016; 388: 1459-1544